

J. S. バッハ作曲「二声インヴェンション」の楽曲分析と演奏解釈

第14番 変口長調 BWV 785

藤 本 逸 子

は じ め に

この小論に先立ち、「J. S. バッハ作曲『二声インヴェンション』¹⁾の楽曲分析と演奏解釈」²⁾と題し、「第1番 八長調 BWV³⁾ 772」から「第11番 ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番 イ長調 BWV 783」と「第13番 イ短調 BWV 784」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」と「同第15号」に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたって、「第14番 変口長調 BWV 785」を、取り上げたものである。

楽曲分析と演奏解釈

「W. F. バッハのための小曲集」⁴⁾(以下「Kb. für W. F. B.」)において、この「Inventio 14」にあたるのは、39番めの曲で、「Praeambulum 8 (BWV 785)と題されている。両者には、表のような違いがみられる程度で、大きな違いはない。

-
- 1) 「二声インヴェンション」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J.S. バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子 1985年(以下「第2号における小論」)の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。
 - 2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「 」に入れて表わす。
 - 3) BWV = Bach-Werke-Verzeichnis, W. シュミーダーによる J. S. バッハ作品総目録番号。
 - 4) 「W. F. バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

表 「Inventio 14」と「Praeambulum 8」の相違箇所

Inventio 14	Praeambulum 8
9 ⁵⁾ 上声 4 拍め A 音 ⁶⁾ C 音 Fis 音 A 音	9 上声 4 拍め A 音 C 音 Fis 音 D 音
19 下声 3 拍め D 音 B 音 C 音 D 音 C 音 B 音 (譜 2) ⁷⁾	19 下声 3 拍め D 音 B 音 D 音 B 音 (譜 1) ⁸⁾

譜 1 「Praeambulum 8」BWV 785 19 ~ 20



楽 曲 分 析 (譜 2 参 照)

この曲は、二つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第 1 部 1 ~ 11 (11)	第 2 部 12 ~ 20 (9)
主 題 1 ~ 3 (3)	間 奏 12 ~ 13 (2)
間 奏 4 ~ 5 (2)	間 奏 14 ~ 16 (2.5)
主 題 6 ~ 8 (3)	主 題 16 ~ 19 (3)
間 奏 9 ~ 11 (3)	終 止 19 ~ 20 (1.5)

各部分における楽曲分析

第 1 部

主題

1 ~ 3 ・ 1 ~ 3 上声部に主題(T)が現われる。(T)は、アルペジオをその要素としており、三十二分音符による装飾されたアルペジオ(a)とその反行形(v)、十六分音符によるアルペジオ(b)とその反行形(q)で、成り立っている。

5) 小節数は、数字を で囲むことによって表わす。例、第 4 小節め 4, 第 3 小節めから第 10 小節め 3 ~ 10。

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例、変口音 B 音, 嬰へ音 Fis 音。

7) この小論における「Inventio 14」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1972) を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

8) この小論における「Praeambulum 8」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach「Klavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1979) を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

第2部

間奏

- 12 ~ 13 ・ 12 ~ 13 下声部は、(a)と付点八分音符と十六分音符による要素(d)とで、c moll F dur B dur Es dur と、5度下の調につぎつぎと転調する形で、ゼクエンツしている。(d)は、1 上声部4拍めの(q)の十六分音符、最初のB音と4つめのAs音、2 最初のG音の動きからきている。そういう点では、(b)の変形と考えられなくもないが、独自のリズム感を重視したいので、新しい要素として独立させた。
- 12 ~ 13 上声部は、2オクターブ上で、1拍遅れて、下声部を追いかけている。13 上声部4拍め最初のG音までは、13 下声部3拍め最初のG音までを、忠実に追いかけている。4拍め三十二分音符からは、次の間奏を先取りするかのように、(v)になっている。

間奏

- 14 ~ 16 ・ 14 ~ 16 前半、両声部は、3度の音程差で、まったく同じ動きをしている。これは、Inventio 15全曲を見渡しても、珍しいことである。この間奏は、すべて要素(a)でできている。それは、(v)(v)(a)(v)(a)(v)(a)(v)(a)(v)と、並んでいく。
- 14 4拍めから 15 1拍めの拍頭の十六分音符のD音Es音C音D音B音C音の動きは、4 1拍めから 5 2拍めの拍頭の八分音符の動きと同じで、それを1オクターブ下で行っている。
- この間、Es dur から B dur へ帰っている。

主題

- 16 ~ 19 ・ 16 後半 ~ 19 前半下声部は、1 ~ 3 上声部の(T)を1オクターブ下で、ほぼ再現している。18 2拍めから、和音的には変化はないが、忠実な再現ではなくなり、(T)最後は、(a)(b)ではなく、(v)(q)になっている。
- 16 後半 ~ 19 前半上声部は、1拍遅れて、下声部を1オクターブ上で追いかけ、緊張感に満ちたストレッチ効果を出している。18 3拍めEs音までは、下声部の 18 2拍めEs音までを、忠実に追いかけている。ただし 17 3拍めは、B音D音F音As音となるべきところが、B音Es音B音Es音と変化している。
- 上声部、18 3拍めと 19 1拍めに(c)の要素である八分音符の動きが出てくる。これは、次の十六分音符とタイでつながれている。それによって、シンコペーションによる緊張感が生みだされ、曲の最後を飾るクライマックスを効果的に引き出している。

終止

- 19 ~ 20 ・ 19 後半上声部は、(v)とカデンツ(K)をおいて、20 のB音に曲を納めている。
- 19 後半下声部は、(a)と属音(K)を経て、これも、20 のB音に曲を納めている。

演奏解釈 (譜3参照)**テンポ**

テンポに関して、諸校訂版¹¹⁾は、表のような指示をしている。

表 諸校訂版における「Inventio 14」のテンポに関する指示

校訂者	テンポに関する指示
Hans Bicschoff	Andante ♩ = 69
Ferruccio Busoni	Allegretto piacevole
Alfredo Casella	Allegro molto moderato
S. A. Durand	Allegro stacato
Edwin Fischer	Andantino piacevole
Vilém Kurz	Moderato
Gin Enrico Moroni	Moderato ♩ = 88
Bruno Mugellini	Andante con moto ♩ = 69
Julius Rötgen	Andante con moto ♩ = 54
John Thompson	Moderato

Ferruccio Busoni 版では、歴時を2倍にして、1小節を四分の四拍子2小節分にして表示してある。

また、内外10人の演奏時間¹¹⁾は、表のとおりである。

表 諸演奏家における「Inventio 14」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	1 35
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	1 22
Glenn Gould	1963 ~ 64年	ピアノ	1 36
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	1 18
András Schiff	1982 ~ 83年	ピアノ	1 21
高橋 悠治	1977 ~ 78年	ピアノ	1 27
田村 宏	不明	ピアノ	1 18
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	1 35
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	1 29
Helmut Walcha	1961年	チェンバロ	1 21

11) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。

演奏時間の差は、あまり大きくない。しかし、三十二分音符の多用のせいか、18秒の差は、テンポ感の差としては大きい。曲の解釈においては、グールドの思い入れたっぷりな演奏と、ニコラエバの力強い演奏は、対照的である。

筆者は、「Andante ♩ = 56」というテンポをとる。なめらかに美しく歌いあげたい。

アーティキュレーション

全曲を通じて、*legato*の雰囲気を保ちたい。区切りを感じる場所は(|), プレスがほしいところは(∨)で示した。

装飾音

原典には、装飾音はない。三十二分音符が、すでに装飾音的であり、筆者は、装飾音を新たに付け加える必要を感じない。

各部分における演奏解釈

- ① ~ ③ ・ *mp* が出る。① 上声(T)は、2 拍め B 音に向かって、少し *cresc.* する。3 ~ 4 拍は、*dim.* する。
- ② 上声部は、① に準じる。③ 上声部は、4 拍めの F 音に向かって、*cresc.* する。この F 音を、(T)及び第1部のクライマックスとし、④ 最初の D 音に(T)を納める。
- 下声部は、上行する音にしたがって、少し *cresc.* し、上声部を支える。
- ④ ~ ⑤ ・ 下声部は、主張気味に *mf* とする。ただし、⑤ 4 拍めでは、穏やかになり、つぎの(T)へ橋を渡すようにする。
- 上声部は、*mp* とし、下声部の声高な主張に対して、諫め、宥めるような受け答えをする。
- ⑥ ~ ⑧ ・ ⑥ 下声部の(T)は、*mf* が出る。低音であることを意識し、太い音にする。
- 上声部、下声部を入れ替えて、細かいディナミックの動きは、① ~ ③ に準じる。
- ⑨ ~ ⑪ ・ この間奏は、細かく転調し、和音のつながりが美しい。ゆっくりのテンポを最大限に生かし、情緒的に演奏したい。
- ⑨ 上声部は、*mp* で始める。3 拍め A 音に向けて *cresc.* する。この A 音を少し *ten.* し、和音が変化する刹那の美しさ、逡巡するような音の惑いを表現する。3 ~ 4 拍は、*dim.* する。
 - ⑨ 下声部は、(♩)二つを区切らず滑らかにつなげる。上声部にそって、*cresc.*、*dim.* する。
 - ⑩ は、*mf* とし、上声部と下声部を入れ替えて、細かい動きは、⑨ に準じる。
 - ⑪ は、*mp* とし、⑨ に準じた動きをした後、インテンポのまま ⑫ の最初の音に、第1部を納める。

- 12 ~ 13 ・ 下声部は、惑いを打ち消すように、決然と *f* で出る。(d)の付点八分音符に向けて、両声部とも、次々と *cresc.* する。重なりあい、競いあうようにして、13 上声部の3拍めのB音に大きく *cresc.* していく。このB音が、この曲最大のクライマックスである。
- 14 ~ 16 ・ 13 の興奮を静めるように、14 1 ~ 2 拍の(v)は、少々 *dim.* する。次に続く(a)と(v)は、4 ~ 5 に準じて、(a)は *mf* 気味、(v)は *mp* 気味にする。声高の主張と宥め諫める会話の中で、全体を *dim.* していき、16 3 拍めのD音とB音に納める。
- 16 ~ 20 ・ 最後の(T)は、*p* で出る。両声部とも、1 ~ 3 の上声部の動きにそったダイナミックをつける。上声部と下声部のダイナミックの微妙なずれを生かして、全体を *cresc.* して、*p*・*mp*・*mf*・*f* と段階的に強くしていく。
- ・ 18 3 拍め、19 1 拍めの上声部の八分音符とそれに続くタイによるシンコペーションの緊張と共に、最後のクライマックスである、19 3 拍め上声部のF音に向けて、さらにエネルギーを増していく。
 - ・ 最後のクライマックスの後、両声部とも、*allargando* して最後のB音に集結し、堂々と曲を締めくくる。

おわりに

「Inventio 14」は、特に間奏が美しい曲である。そこでは、主題の要素が充分生かされながら、主題の安定性とは正反対な細かい転調の連なりなど、危うさの魅力を楽しませてくれている。

また、3度の音程を順次上がり下がりするだけの単純な要素とその反行形の会話が織り成す雄弁さにも驚かされる。その会話の中で、弾き手も聞き手も、心の思いを語る面白さを充分に味わうことができるであろう。

譜2 「Inventio 14」BWV 785 [1] ~ [20] (楽曲分析)

第1部主題

B: o.p. c

B: c

B: F: c

B: F: T c

B: F: g: Es: c

11 第2部間奏

Es: C: F:

13 間奏

B: Es:

15 主題

Es: B:

17

B: T

19 終止

B: K

譜3 「Inventio 14」BWV 785 [1] ~ [20] (演奏解釈)

Moderato

[1]

mp

第1部のクライマックス *mp* *mf* *mf*

[3]

[5]

mf *mf*

[7]

Tのクライマックス

[9]

mp *mf*

11

mp *f*

最大のクライマックス

13

dim. (mf) *(mp)*

15

(mf) *(mp)* *(mf)* *(mp)* *(mf)* *(mp)* *p*

17

最後のクライマックス

19

allargando

参考文献・参考楽譜・参考CD

* 参考文献

市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(音楽之友社)

山崎孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(ムジカノーヴァ)

* 参考楽譜

Johann Sebastian Bach「Klavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1979)

BACH「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1972)

J. S. BACH「Inventionen Sinfonien」Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)

J. S. Bach「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H & Co., K. G., Wien 1973)

BACH「INVENTIONEN UND SINFONIEN」Urtext (Edition Peters, Berlin 1933)

Johann Sebastian Bach「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)

Johann Sebastian BACH「TWO-PART INVENTIONS」Hans Bischoff (Belwin Mills Publishing Corp. N.Y.)

J. S. BACH「15 INVENTIONEN」Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach)

BACH「TWO- and Three-Part Inventions」Ferruccio Busoni (G. Schirmer, New York 1967)

BACH「INVENZIONI A DUE VOCI」Alfredo Casella (Editioni Curci, Milano 1982)

J. S. BACH「Inventions à 2 et 3 voix」Durand S. A. (Editions Musicales, Paris 1957)

J. S. BACH「ZWEISTIMMIGE INVENTIONEN」Edwin Fischer (Wilhelm Hansen, Musik-Forag, Copenhagen 1954)

JOH. SEB. BACH「15 Zweistimmige Inventionen」Alfred Kreutz (Edition Schott, Mainz 1916)

BACH「DVOUHHLASE INVENCE A TRIHLASE SINFONIE」Vilém Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)

BACH「15 INVENZIONI A 2 VOCI」Gino Enrico Moroni (Carisch S. p. A. Milano 1944)

BACH「INVENZIONI A DUE VOCI」Bruno Mugellini (G. Ricordi & C., Milano 1983)

JOH. SEB. BACH「ZWEI- UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」Julius Rötgen (Universal Edition, Hungary 1951)

BACH「THE TWO-PART INVENTIONS」John Thompson (The Willis Music Company, Cincinnati)

長岡敏夫編「バッハ インヴェンションとシンフォニア」原典版(音楽之友社 1965)

角倉一朗校訂「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」原典版(カワイ出版 1983)

全音楽譜出版社出版部編「バッハ インヴェンション」(全音楽譜出版社)

Hans Bischoff 角倉一朗訳「J. S. バッハ インヴェンションとシンフォニア」(全音楽譜出版社 1972)

Ferruccio Busoni 伊藤義雄訳「二声インヴェンション」(Breitkopf & Hartel, Frankfurt 1914)

井口基成「バッハ集 二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」(春秋社 1983)

千倉八郎編「バッハ インヴェンションとシンフォニア」(日音楽譜出版社 1983)

* 参考CD

Aldo Ciccolini (Piano)「J. S. BACH INVENTION」TOCE6601 (TOSHIBA EMI)

Christoph Eschenbach (Piano) 1979「INVENTION & SINFONIA」F26G20323 (POLYDOR)

Glenn Gould (Piano) 1989「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」28DC5246 (CBS SONY)

Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986「J. S. Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」VDC-1079 (VICTOR)

András Schiff (Piano) 1985「J. S. BACH 2 & 3 PART INVENTIONS」FOOL-23100 (POLYDOR)

高橋悠治(Piano) 1991「インヴェンションとシンフォニア 他」COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)

田村宏(Piano) 1989「J. S. バッハ インヴェンション」CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)

Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985「J. S. BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」POCA-2113 (ARCHIV)

Gustav Leonhardt (Cembalo) 1992「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」BVCC-1863 (BMG VICTOR)

Helmut Walcha (Ammer-cembalo) 1961「J. S. バッハ / 2声部のためのインヴェンション & 3声部のためのシンフォニア」TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)